おばあちゃん、元気でいてね

八基小学校3年
岡崎（おかざき）　隼也（しゅんや）

ぼくのおばあちゃんは、足をいためています。だからおばあちゃんが立つ時には、
「おばあちゃんのうでをもって。」
と言います。ぼくは、すぐに
「うん、いいよ。」
と言ってうでをもって立たせてあげます。おばあちゃんは、おもたいけど、力をいれてがんばります。ぼくが、
「大じょうぶ。」と言うと、
「ありがとう、たすかるよ。」
と言って、うれしそうにあるいていきました。おばあちゃんに、おれいを言われると、ぼくはいい気もちになります。おばあちゃんもぼくがたすけてあげるので、いい気もちになると思います。

おばあちゃんは、足がわるいのに、しごとをしています。やまといもをきったり、あらったりしてかごにいれていくしごとです。すわってやるけど、見ていてとてもたいへんそうです。時どき、足をなでています。ぼくは、おてつだいしてあげたいなと思うけど、まだうまくできません。

よるになって、やっと家へかえってきます。ぼくは、
「おかえりなさい。」
と言います。おばあちゃんは、つかれていて、足もいたそうです。

夕ごはんのあと、かたたたきをしてあげました。おばあちゃんは
「気もちがいいよ。」
と言ってくれました。ぼくは、かたをトントンたたきながら、
「おしごとたいへん。」
と聞きました。すると、
「そりゃあ、たいへんだよ。でも何だってがんばらなきゃだめなんだよ。」
と言ったので、ぼくもがんばらなきゃと思って、かたを五百回たたいてあげました。おばあちゃんは、
「ありがとう。」
と言って、うれしそうに、ぼくのあたまをなでてくれました。ぼくもなんだかうれしくなりました。

つぎの朝、足のいたみもちょっとなくなったそうです。ぼくは、よかったなと思いました。

これからも、おばあちゃんのすきなお花のなえをいっしょにうえたり、かたたたきをしてやったりして、おばあちゃんによろこんでほしいです。おばあちゃんが、けんこうでなが生きできたらいいなあと思います。おばあちゃんをだいじにしていきます。

武者と生まれて描く虹
～畠山重忠伝説～

⑧二俣川の朝露に

元久二年（１２０５）六月二十一日、北条時政は子の義時と時房に畠山重忠を討つ計画をはじめて明かした。義時は、「重忠は頼朝に忠節を尽くし篤く信任されていた。その彼が幕府に対して謀叛を企てることなどありえない」と、計画の中止を訴えたが、時政に聞き入れられることはなかった。

そのような陰謀が進んでいるとは思いもしない重忠は、六月十九日、菅谷館を出立。鎌倉街道を南下していた。

六月二十二日早朝、鎌倉の御家人たちに「謀叛の輩を誅せらるべし」という幕命が下り、御家人たちは武装して由比ガ浜へ馬を走らせて行った。父・重忠の留守を守っていた畠山重保も、わずかに郎従三人を率いて由比ガ浜へ走った。しかしここで待っていたのは、重保追討の命を受けていた三浦義村の手勢であった。重保はここで謀られたと察したが、多勢に無勢、重保は奮戦するも、ここが最期の地となってしまった。

重忠は軽装の旅姿であった。従者は次男の畠山重秀と本田近常、榛澤成清の二将以下百三十六騎で、朝露が降りた二俣川に着陣した。重忠はここで前方に大軍が立ちはだかることに気づき、それが自分たちを追討するために出陣してきた鎌倉勢であることを知る。近常と成清は、「菅谷館へ戻って軍勢を整えましょう」と主張した。しかし重忠は、「謀反心など少しもない。ここで潔く戦おう」と、言い放った。

しかし、数十倍の兵力の鎌倉勢と激戦を繰り広げた重忠勢であったが、午後五時頃、ついに弓馬の友・愛甲三郎季隆の放った矢が、重忠に命中した。

夢なかるべからず

自然と会話する造景デザイナー

小林（こばやし）　徹（とおる）さん

景観創造人

今（はやり）の流行はデザイン重視の庭造り。見た目には新鮮で美しい景観でも、実際には植物と会話をしていない庭。そんな庭造りが多い中、自然と向き合い、共生しながら、数年後の姿を見据えた景観づくりをするプロフェッショナルがいる。造景デザイナー　小林徹。

高度な技術を有し、第2回ものづくり日本大賞・内閣総理大臣表彰での最年少受賞をはじめ、国内外を問わず数々の主要な造園コンテストで受賞し続ける。

成功を夢見て…

父親は、川本で大正元年から続く造園業の三代目。仕事に打ち込む父の背中と、美しい自然を見て育った。

親子とはいえ、「男同士」であり「ライバル」だった。それゆえ、父親の行動や言動に反発を覚えていた。20歳の時、母親に反対されながらも、「父親以上のことをしたい。」と思い独立を決意。25歳で念願の独り立ちを果たした。

独立後は、資金難の中、テニスコーチの仕事を掛け持ちながら、休みなく働いた。ものづくりが好きで、何もかも気が済むまでやらないといられない性格のおかげで、何とかやってこられた。技術者としての理想・信念・夢を持ち、いつか必ず成功すると信じて。

国際ガーデン＆エクステリアEXPOでの講演

深谷市主催のガーデニング教室

後進の育成

造園の現場は過酷であるがゆえに、若い職人が自分の仕事を振り返る暇（いとま）もなく、「ものづくりの魅力」を実感する余裕がない。

「ものづくりの原点である職人の待遇や質を高めつつ、若手を引っ張っていけるような人になりたいですね。」

仕事には人一倍厳しい小林も、自宅に戻ると2児の優しい父親だ。今なら、父親を理解できる。一家の主、そして経営者として、父親と同じ土俵に立ったからこそ分かることがある。

造景デザイナーとして活躍するきっかけを与えてくれた両親への思いは、「反発」から「感謝」へと変わっていた。

夢七訓（ゆめしちくん）
夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに　幸福を求める者は
夢なかるべからず※

（本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています）

※渋澤栄一が残したとされる「夢七訓（ゆめしちくん）」より。「夢なかるべからず」は「夢を持たないといけません」という意味。